翻 訳 の 部

子育てへの6つのアプローチ
～社会目的学的アプローチ～

Six Approaches to Child Rearing
～The socio-teleogical approach～ by D. Eugene Read

足利市立第二中学校　太 田 武 久

は じ め に

(1) この本を翻訳しようとした理由

この書を翻訳しようとした理由として，昭和57年12月18日，足利市民会館において，野田俊作氏(大阪府立病院精神神経科医師)より，「登校拒否・非行は治せる」との演題で，講演を聞いた事があげられる。氏はアドラー心理学を中心に話をすすめられたが，その中で，「すべての行動にはわけがある」そして，それは「原因」でなくて「目的」であると説かれた。意識的であるかもしれないし，または無意識にであるかもしれないが，その目的を達成するために，ある行動を起こすのである。したがって，その目的をしっかり見きわめ，それに達する他の手段があることを認識させたり，あるいは与えることによって，行動が変わるのではないかと述べられた。この説に，実践的にも興味を覚えアドラーの心理学書を読んでいる時に，高橋黄未氏(当時二中校長)により，上記の本を紹介され，6つの子育てへのアプローチのうちの1つに，アドラーによる社会目的学的アプローチがあるのを知り，翻訳しようと考えた。

(2) 上記以外の子育てへのアプローチ(本書における)

- 精神分折学的アプローチ(The Psychoanalytic Approach)
- 発達心理学的アプローチ(The Developmental psycological Approach)
- 認知発展的アプローチ (The Cognitive-Developmental Approach)
- 実存主義的アプローチ (The Existential Approach)
- 行動主義的アプローチ (The Behavioral Approach)

(3) アドラー(Alfred Adler 1870～1937)について

ウィーンに生まれ，ウィーンに育った。フロイドと同じく，ユダヤ人であった。1895年にウィーン大学医学部を卒業。初めは眼科を専攻したが，後に精神科に転向した。1902年フロイドの講演によって，興味をそそられ，精神分折の流れに身を投じる。そして，1907年，彼の学説の支えとなった「器管劣等に関する研究」を発表した。最初はフロイドに親愛感を持って接せられたが，後に，冷厳な別離を味わわなければならなかった。社会的なことに関心の高かったアドラーにとって，フロイドの汎性欲説は受け入れ難いものであっ

た。彼は，フロイドの性欲に対して，「権力への意志」を人間の欲動の根本的なものとして立て，心の現象を説明しようとした。

アドラーは，器管劣等の概念を発展させて，すべての人間が持つ劣等感情の存在とそれを補償してなされる努力の種々相について，注目することになった。フロイドと分かれ，自分の説をそれと区別して，個人心理学(Individual psychology)と呼ぶようになった。1913年にアドラーは，ウィーンにある「問題児のための第一個人心理学治療所」の所長となり，ここで，問題児の研究，治療に従事，劣等感の持つ重要性をますます痛感し，子どもの持つ劣等感と，その克服について研究を発表していった。精神分折に興味を抱きながらも，その性欲説を受け入れられなかった教育者や社会事業家・宗教家などは，アドラーの説を歓迎した。人間のもつ劣等感，それを補償しようとして形成される。その人の「生活の様式」(life-style)を指摘し，解釈して，そのゆがみを是正していこうとするアドラーの方法は，一種の再教育の過程とも考えられ，多くの教育者たちにとり入れられるようになった。このことは，フロイドの初期の研究が，無意識の心的内容の分折に主力をそそいでいたのに対し，むしれ，自我の役割の重要性を強調したものといえる。そしてまた，人間の持つ「社会的感情」(community-feeling)の重要性を強調し，神経症の治療法として大切なことは，個人の劣等感からくる人格の歪みに気づかせ，再び，社会の中の一員となるように再教育することにあると考えた。このような再教育的な手法は，後のカウンセリングの発展の大きな基となっていると考えられる。～ 教育相談事典 ― 金子書房より ～

(4) 著作者 D. Eugene Meadについて

D. Eugene Meadは，ブリアムヤング大学における，子供の発達と家族の関係についての準教授である。彼は，アメリカ心理学協会の会員であり，彼の仕事は，親の教育とカウンセリング，家族のコミュニケーション，夫婦感と家族のカウンセリングである。彼はまた，両親や専門家のために，子育てについての多くの論文を出している。

1. 子育てへの社会目的学的アプローチ

社会目的学論(socio-teleological theory)は，フロイドの流れを吸む，アルフレッド・アドラーによって始めて，提唱された。内科医であったアドラーは，身体的発達と，心理的な発達との間に共通点を見い出した。例えば，腎臓のように器管が悪くなると，もう一つの腎臓や他の器管が身体の要求(needs)に応じるために，大きくなって，身体的な欠陥を補うことがある。これと同じように，パーソナリティの中で，何か弱い面が出てくると，精神的にそれを補うものが出てくるものだとアドラーは考えた。また，人間は心理的にマイナス面から，いつも，プラスの面へ動こうとしているものだとも考えた。この弱さや劣等感の感情から強さや優越感に行こうとする努力が，他の人との相互関係の中で，目的(goal)を求めることなのである。このようなわけで「社会目的」は，社会的努力，社会的な目的追求と言う

こともできる。アドラーは常に「家族」に関心を寄せており「両親」に対する研究もしている。そして，アドラーの後継者であるルドルフ・ドレイカーズ(Rudolph Dreikurs)は「子供」との関係で，アドラーの説を補足している。

2. 人間の性質に対する社会目的学的な見方

社会目的学の見方からすると，人間は，環境に総合体として心理的に反応する生物的な有機態だと言える。他の生物に比べて，人は，心理的に弱く，また劣等感を感じる事があるので，この劣等感や弱点を増大してしまうことがある。小さな子供は，環境における多くの事をコントロールできないので，ドアをいとも簡単に開閉したり，自分の頭の上で蛇口から水が飲める大人を，不思議な力のある物として恐れている。自分の力の無さを見，他の人が世の中をコントロールしている力を見て，自分を補う道を探し出そうとする。そして，この小さな子は，弱く役に立たないものとして振まうかもしれないし，あるいは，勇敢にどなり散らしたり，攻撃的に怒ったりするかもしれない。2.3年経つと性格的な型，アドラーの言う「生活の型」(style of life)を作り上げ，無意識的に自分の行動を導いていく。5才位になると子供は，一生涯自分についてくる個人的な目的(goal)を身につけるものである。

個人が自分のものとしてきめている目的は，自分と環境が作り出したものである。そして，これは子供のイメージと環境に応じて，早い時期に形造くられる。他の人々，とくに，両親は環境の重要な部分を形造っている。しかし，それは，自分自身の子供の見方と環境であり，自分の「生活の型」を決定する客観的な目的ではない。遺伝的なものは，個人の早い時期の目的の発達に関係がある。子供の身体的な特徴は，自分が発展させていく自分のイメージを決定するのに役立っている。もし，自分を強く協調性のある者と見れば，不器用なものだと見ている時とは全く違う自分自身を描く事になる。両親はここでも，一つの役割を担っている。例えば，“エビ足”のような欠陥を持って子供が生まれてきたとする。その子の考えは，両親の反応で大部違ってくる。もし，両親が，子供が困難を克服してハンディキャップにもめげず有能な人間になるよう振まっていれば，子供はこの見方を受け入れるものである。

もし，子供が自分を有能な価値のある者と考えると，社会的感覚(social feeling)や社会的関心(social interest)のセンスを持ち合わせた大人に成長していく。アドラーは「社会的関心」はユニークな人間の特徴であり，全ての人に与えられているものと定義している。子供の時の出来事は，「社会的関心」や所属感を強めたり，弱めたりする。このような感情がある事は，他人との協力や貢献への気持ちが子供の中にあることで，よく判る。失敗への恐れは，自分同様，他人にも都合よく問題解決を求めていく気持ちどころか，個人的な優越感を求める気持ちを，子供に持たせがちである。

完全な進化論者であるアドラーは人生の目的を，生活の完成だとしている。完成への目的は社会的関心本来のものである。個人では完成されないので，他の人との協力の上で完成への目的に進んでいく。個人の優越感の目的は，社会的関心のねじ曲がったものである。なぜなら，それは，他の人が発展していくのを制限したり，くつ返したりすることになりかねな

いからである。

最終的に，人は3つの基本的な人間の問題に答えを見い出さなければならないとアドラーはのべている。一つは，どのように社会的に関係するか。二つ目は，どのように自分の欲求(needs)—仕事等—に答えるか。最後に，どのように感情的な欲求—愛—に答えるかの3つである。これらへの挑戦は，一生涯を通して，我々とともにあり，また，これらは，自分たちの進化の歴史の基本的なものである。

基本的な身体的欲求に直面する問題を解くには，協力と分業が必要である。社会的な感情というのは，皆のために一緒に働く必要性の中に存在する。自分個人の欲求とグループの欲求に答える時間をどのように割り当てたらよいかを解決する事は全ての人に意味がある。仕事を選ぶ事は，その人の生活の様式と，社会的関心の感情が，どこまで，発展しているかによって，強く影響される。役に立つ仕事をしている人は，自己進歩的な社会に住んでおり，その社会に貢献している。この様に仕事の中で，その人は社会的に，他の人々と結びついている。

個人が，感情の欲求を解決しようとしている時程，行動の中で社会的関心が，明らかにされる事はない。愛は，基本的に2人の仕事である。協力は，友情の中でも，また，子どもを持とうとしている配偶者との性的な関わりの中にでも必要とされている。愛や友情は，他の人への委託(commitment)だと言える。「子育て」は，どちらでも片方の親に残された場合，完全に成功しないものである。子育てに入るのを断わることは，当然やらなければならない仕事において，二人の親の中に，疑いと不信を示すことになる。このような疑いや不信は，子どもたちの社会的関心を導いていくことにならない。

「人生は，それが持たらす問題の中で，いつも我々を試しているのだ」とアドラーは結論づけている。我々の社会的関心と，他の人の社会的感情を高めているから正しいし，失敗した時は，自分自身と自分達の破壊への種をまいているのである。それ故，人間は社会的な生き物である。完成や自分の個人的な理想や目的を全うする努力をしながら，各々個人は基本的な人生の問題を解決しようとしている。そうしながら，人は，人類の進歩が，ゆっくり，進化への過程を進んでいるように，その進歩に加担したり，引いたりしている。

3. 子供の性質の社会目的論的見方

社会目的論者達によると，子供は社会的関心のセンスを持って生まれてきているとされている。それは充分発達した社会的感情を持った大人になる可能性があるという事である。適切な助言が与えられると，他の人たちと協調的になり，社会の他の人達に役立つよう貢献することを求める。

また，子供たちは，他の人達を自分と同等のものと扱い，自分が尊敬されたいと望むように，他の人を尊敬するようになる。社会的感情は，子供の遺伝や環境，そして，それらをどう見るかによって影響される。アドラー達が，子供のパーソナリティーの進歩において，これらの変化の相互作用をどう見ているかを，ここに書くことは重要である。

既に見てきたように，子供が遺伝的に引き継いできたものは，発展している「生活の様式」に影響を与えることができるが，それ以上に「生活の様式」に影響を与えるのは，その子が環境との相互作用の中で，いかに能動的に，関わっていくかである。

アドラーは，遺伝や環境が子供の行動に影響を与えるが，その行動を決定づけるものではないと繰り返しのべている。しかし，その中でも，環境の方が遺伝的なものより影響力が強いと述べている。

ドレイカーズ(Drekurs)やアルドレッド(Aldred)は，アドラーの発展する子供の生活様式に対する両親や兄弟達の影響説を引き継いでいる。夫と妻によって作られる「家族のふん囲気」は家族の者達の間に多くの類似点を作り出す。もし両親が，協力とお互いに助け合う気持ちを確立していれば，子供達は生活様式の中に，協力の型を作ろうとする。反対に，両親がいつも，お互いの関係の中に，力や位置を獲得しようと争っていれば，子どもたちも，争い好きな相互作用の型を採用しようとするものである。

同じ家族の中での子供たちの間の違い ～ 例えば，ひとりの子は大変本を読むのが上手なのに，もうひとりは下手だとか，ひとりの子は大変運動好きなのに，片方は勉強好きだ ～ は兄弟間の関係によって作られていく。家族の座(The family constellation)というものは生まれの順や，それが子供の生活様式に与える影響に原因するものである。最初に生まれたか，二番目に生まれたか，それとも三番目に生まれたかという事は，人生経験にかなり違ったものを与えるものだ。

第一子は，一・二年間の両親による誰にもじゃまにされない注目(attention)を経験する。しかしながら，普通この地位は，次の子が病院から連れてこられた時，突然，終わりになってしまう。アドラーによると，この出来事に対して用意ができていて下の子を面倒見ることが教えられてあるならば，この地位降下(dethronment)は概して早くすんでしまう。多くのケースに見られるように，もし子供が準備されていないと，自分の気に入った位置を失うことの痛みは，とても大きい。第一子はしばしば，父母の役割をするものだと，アドラーは述べている。第一子たちは，妹や弟達のための責任感を与えられ，また，それを引き受けている。第一子が両親の役割をするという事は，モデルにするものが，第一子には誰もいないからだとも説明できる。第二子は，モデルとして自分の上の兄弟をいつも持っているとアドラーは指摘している。結論として，第二子は第一子よりも協力性を持つべき事を知るのには，より良い位置にいるのだと，彼は述べている。

また，アドラーは第二子からの圧力は，二人の間の戦をつよくし，その圧力に応じて，第一子は自分より若いライバルの前で，一生けん命頑張ろうとするとも言っている。

末っ子については，彼は次のように述べている。末っ子は永久に家族の赤坊になっている。そしてこの子達は，決して王位退位(delhrone)されることはない。それなので，常に特別なままでいる。他の兄弟が世話をしてくれるので甘やかされる危険がある。そして，他の人を世話をしてくれるものと期待し，問題を解決してくれるものと期待しがちである。また，最後に，末っ子は多くのモデルとけんかの機会を多く持っているので，大変強くなることもある。

また，彼によると問題の子は，一子と末っ子に多いと述べている。第一子は，王位退位に苦しんで，母の注目を得るために戦うことがある。そうしながら，批判的になりがちであり権利を求める性格になることがある。また，ルールを守る人になる事もあり，他の人より力や権力を維持したいという事から保守的にもなりがちである。

いろいろなデーターがアドラーの説を支持しているが，また一方，それは決して決まったことではない。一子は友情を守るのに困難だと思われているが，コーチ(Koch)によると，一番上の娘は，他の子よりもっと親しみやすいと言われている。サンプソン(Sampson)は一子と，後に生まれた子の間に権威主義の違いは見られないとし，また，一子は他の兄弟よりも低い自尊心を持っている事を明らかにしている。

末っ子は，より甘やかされているとアドラーは述べている。甘やかされた子供は，独立できない。この子たちは，世話をしてくれる人たちが多くいるので，このように甘やかされてしまう。両親や子供との，また，一人ひとりの子供の相互作用に対するアドラーの興味と注目は，社会的な環境の重要性によるものである。

どの子供も，個人的な可能性を持って生まれてきている。そして，同じような環境を持った多くの子供たちが，ちがった個性を残してきている。これは，子供の創造的な力や可能性によってなるものである。

子供は自分の目的を選び，そして，世間を自分の考えに合わせようとしているので，遺伝や環境が絶対的な役割を果しているという考えに，アドラーは反ぱつしている。遺伝や環境は，可能性という点に，問題や影響を用意できるだけである。子供や後の大人は，その事を選び作用する。ただ単に反応するだけではない。子供の創造的な力は，最終的に決定する力である。子供は自分で見るように，自分の障害をとり除こうと努力している。反応としても可能性に終わりはない。試行錯誤を通して，子供は目的をつくりあげ，生涯を通してそれについていくものである。試行錯誤の原理はまちがいの可能性に開かれている。子供はまちがいを犯すだろう。だれも問題をとく一番良い方法など解らない。数千の可能性の中で，彼は貧弱な結論を選ぶかもしれない。しかし，そのまちがいからその答えは良くない事を知ることができる。両親は，子供がまちがったことを指摘するのでなく，もう一つの方法があることを指摘できる。かしこい両親は，他の方法をもう一度やってみる勇気を与えるものである。

4. 子育てに対する社会目的学理論の応用

社会目的学論者によると，人が一緒に生活するために必要とする高い価値の獲得には，自然な社会的な努力が必要だということになる。それだから，社会化の段階の初歩的な役割は社会的関心を引き出すことである。社会的関心は，一人前の天性として生まれつきのものでなく，むしろ，生まれつきの可能性であるので，意識的に発展されねばならない。子供に社会的関心を持つことを勇気ずける責任はまず，両親にある。子供が最初に個人的に関係するのは，母であり，家庭である。家族の輪の中に自分自身を見つけ出すきっかけがある。決定は子供の創造力な力にまかされており，そして，社会的環境と，自分で身体を通して持った経

験によって導かれていく。世の中が自分が参加するのに安全なところかどうか，生き残るために他に優越であることを永遠に努力しなければならないかどうかという決定は，彼の生活様式や目的を決めるものである。最終的に決定するのは子供によるが，両親は，それを準備したり，勇気づけたりするふん囲気を通して，重要な役割を演ずるかもしれない。

子供の社会的関心の発展を持たらすために，両親はパーソナリティーの発展の力学を理解しなければならない。アドラーとその弟子たちは，子供を二つの刺激にふるまったり，それに反応するものとして見ている。内的な刺激は心理的なまた遺伝的な機能である。子供は，外的な環境にも応じている。両方とも子供の創造的な可能性によって影響され，そして，3才から5才の後，両面の環境から受けた信号をいかに通訳していくかを決定する生活様式を設定してしまう。この目的は，見せかけの決定である。それは，子供が劣等感から安全になる場所を生活の中におこうとするこころみである。しかしながら，この期間の子供の経験は限られているので，社会的に最も効果的アプローチに対して，まちがった結論を引き出すかもしれない。これは，生活の問題の解決にあまり効果がない。または，まちがえたアプローチをする事になるかもしれない。

劣等感に対して自分を守っていくこころみとして，まちがった目的を選ぶことがある。その理由として，両親の期待と親の子供のまちがいに対する反応があげられる。両親の期待は微妙なきっかけを子供の行動に与えがちである。“この子は，いつも悪い子(devil)だ”とか，“この子はいつも人の前ではずかしがっている”とか言っている親は，子供にそのように行動するのを期待する合図を送っているようなものである。そして，子供は意識的でなく，それに応じてしまう。

子供のまちがいに対する親の反応も，子供自身や社会のシステムにおける価値に対して，まちがったものを子供に取らせてしまうことがある。子供のまちがいを見る事によって，もう一度やってみようとするのを止めてしまうこともある。我々親は子供に“おまえは良い子ではないが”変わった時には受け入れてやろうという気持ちを与えている。このように子供を落胆させることによって，自分の問題を受けとめ解釈しようという能力を経験させないでしまいがちである。両親が子供のまちがった目的の犠牲になってしまうのに，もう一つの方法がある。両親はしばしばまちがった行動をそのままにしたり，助長してしまう事がある。ある面では，これは子供を「劣っている者」として扱う傾向があるからであるとドロイカーは感じている。民主主義では，全ての人々は同等だと感じるべきである。したがって，子供も同等に扱われるべきである。社会目的論者は，これを社会的な同等と述べている。勿論，子供は経験や教育の場で同等とは言えないが，自分のために目的を選んだり，決めたりする個人としては，同等の尊敬を受けるべきである。

ドレイカーは，子育てにおいてなされる間違いの多くは，自尊心を維持する間違いによるものであると述べている。不幸にも，多くの親は，最も簡単な問題すら解く子供の力を認識しないでいる事が多く，結果として，子供のために，親がすばやく問題を解決してしまい，こうすることによって子供の「劣等感」や「自己嫌悪」の気持ちを増大してしまう結果になる。

どんなに失望した子供でも，地位を得てグループの中にある場所を見つけたいと思っている。無作法を行ったり，他人の要望を無視しているような子供でも，自分の行動が社会的な地位を与えてくれるものだと信じている。

ドレイカーによると，子供をコントロールしようとする試み，力や優越感の点で，両親と子供間に争いを起こすかもしれない。子供は思いのままに行動することを望み，両親がやってもらいたいと思っている事を断るような行動をする。両親は，まるで自分たちの権利や，自分の家を支配する特権が，攻撃されたように感じる。「子は親にそんな事はできない」というコメントを言っているように思われる。感情的に怒って，そのような子供たちの行動に反応する。そして，子供は協力を断ることを正そうとする親のこころみに会い，速に，怒りや反抗心を強めさせることになる。

受身的な子供たちや，いつも落胆させられている者は，成功する希望はもうないと感じ始める。もう一度，失敗するのではないかという恐れで，一緒にやってみようとすることを止めるかもしれない。落胆した子供は，行うように頼まれたり，期待されたりすることに反対するように，本当の劣等感に隠れてしまうかもしれない。そのような子は，非常に簡単に，彼は何も出来ないのだと両親に確信させてしまう。両親は落胆し，本当にその子は力がないのだと信じこんでしまう。

両親はこのように振まう子に，何ができるだろうか。勿論，第一に両親は，その子の目的の性質と他の者へ反応する典型的なパターンに気をつけなければならない。この特別な子は起きる前に呼ばれる必要があるのか，ベッドから起きる事が，親と子の口論や争いになるのか，協力的な子は起きて行くかもしれないし，注意を望んでいる子は，親に呼んでもらう事を要求しているかもしれない。また，力を望んでいる子は，起きる事が，その日の戦争になるかもしれない。

明らかに，一つの事件や，一つのエピソードでは，目的が明らかでない。私たちは，毎日毎日繰り返し起こる行動の型を探さなければならない。両親は，典型的な日を通して，子供の行動を観察し続けなければならない。子供がどのように服を着，朝食に来，また学校に出発していくか，この行動は先生に指摘されたような事なのか，どのように学校から帰ってくるか。子供が社会的なグループにおける他人の要求に責任を持たなければならない全ての時に，両親は，その子の目的を見ることができる。

一たび，両親がその子の目的を知ったら，子供の行動を変えることのできる位置にいると言える。もし，社会のグループのあるメンバーが行動を変えると，他の者も行動を変えるようになる。他の人が行動を変えると，我々も変えるものである。本当に子どもの行動を変えようと願っている親は自分自身の行動を変える事を始めるように忠告されるだろう。

常に，不相応な注意と奉仕を求めている子供の場合は，両親は子どもの要求に対する反応を変えることによって，小供の変化を持たらすことができるかもしれない。子供が，明らかに力を持っており，自分自身でやれる範囲で奉仕と注意を求める時には，両親は，その子の要求に耳を傾けず，自分のやらなくてはならない仕事に専念すべきである。親は子の要望に

「私は，おまえはそれが出来る子だと知っているよ」という励ましの言葉で，認めてやるべきである。しかし，子供の能力や可能性について長い話は避けるべきである。時々は，親が部屋を去るか，子供が仕事を終えるまで他の所に行かせることも必要である。この方法で，親は，奉仕への子供の要求に応じることができないようになれる。

基本的な目的が力である子に会った時，両親はもう一つの行動の組を変える必要がある。最も典型的な反応は，助ける事を少なくすることである。だれかが，戦いをいどんで来た時，普通の傾向は戦い返すという事である。子供も両親も，しばしばこの方法でお互いに口論したり，けんかしたりする事を教え合う。片方が挑むと，片方がそれに対応し続ける，もし，両親のこの型を変えようとするのなら，この戦いから逃げるべきである。もう戦わない事を決心しなくてはいけない。

子供との戦いを止めることは，しばしば，むずかしい事である。一つの方法は，戦いを損なものときめつける事である。それがどのように始まろうとも親が戦いに参加していると感じたらすぐ“また戦っている。もう止める事に決めた”と簡単に言うべきである。これは，親の側によってやられるべきである。戦略としても「引き下がる」ことは役に立つものである。

子供が刻々と戦う時，いつも，その場から退却することは役に立つ。結局は誰もいない部屋で叫んでも，一向におもしろくないからである。争う相手がいなくなって，子供は過去に持っていた問題を解決することができなくなる。このような退却は，より良い場面を設定することである。両親側に，誠に良い助けを持たらすものである。

子供との争いから，自分を動かさない理由に，部屋を壊したり，傷つけたりする恐れがあるからである。しかし，子供が以前，このようなモデルを持っていなければ，めったには起きない。もし起きたら親は，これを2つの問題として考えるべきである。感情的な反応が過ぎたら，親も子も座りこんで，その部屋をなおすべきである。もし，直すよう期待されれば子供は責任感を感じる。

彼等の行動を変えようとする時，両親はお互いに援助と補強を必要とする。復しゅう心の強い子供に価値を認識させようとするならば，とくに，協力が両親の間で必要である。長くねばり強く続ける努力によってのみ，このような子供はまちがったゴールを捨てるようになり，より役に立つものを獲得するようである。

やってみない方が安全であると確信している，深く落胆した子供は，まちがいやエラーを指摘することによってもっと深く落胆させられてしまうものである。不幸にも，多くの両親は，子供を助ける外の方法を知らないのである。結果として，進歩するように子供を助けようとしているのに，　に劣等感や屈辱を与える事になってしまう事が多い。

この行動を変えるために，両親は子供たちに落胆するような事を教えてはいけない。その代りに両親は子供達をどうしたら勇気づけられるかを学ばねばならない。ディンクメイヤーやドレイカーズによると，勇気づけるカギとなるものは，その人自身の自信であり，また，どんな事が起きようとも対処する力である。勇気のある子は，問題への解決を探すことに働くことのできる人と見られている。どんな時にも，どんな問題にも，解決を見つけない人は，

自分を小さく感じるようになるだろう。

子供は，自分自身を価値のある者として価値を見つけるのであり，成功のためでなく，成功しようと頑張っている者として，価値を認めるべきである。子供は，このような型の人として，取り扱われると，このようなタイプの人になる。両親の役割は自分を勇気ある人間として見ることを教えることである。

ディンクメイヤーとドレイカーズは，両親が子供に勇敢になるように教えられるいくつかの方法を示している。まず，最初に，両親が今のままの子供に価値を置くように練習すべきだと言っている。

両親は子供の長所や能力を取り出し，それに注意を焦点化すべきである。今，最も良いと思うことより多くの事を望まない方がよい。本当の業績が認識されるべきである。

子供を意欲づける2番目のステップは，家族のグループを通してである。注意深く観察することによって，両親は家族の中のメンバーが，どの位お互いに影響しあっているかどうかを知るだろう。

ある時は，父が一人っ子には，もっと多くの影響を持たらしているかもしれないし，またある時は，兄弟が特別な子供を助けるのにより多くの力があるかもしれない。夕はんの席を変える事，例えば，落胆している子をよく話す子から離している等の事ができる。このように動かした事で，落胆している子に，自分のやった事について話すチャンスを与える事になるかもしれないし，また，問題を解決しようとしたこころみは，家族の認識を得るかもしれない。

子供の性質を知ることによって，また，子供達がどのように自分の「生活様式」を型づくるのかを知ることによって，両親は社会的関心を助長させる事ができる。両親は，子供たちが，他人の要求を考えに入れて問題を解決していくのを手伝うことによって社会的感情を教えるのである。

個人がこの時に，進歩的な完成に到着するのは，充分に発展された社会的関心のセンスを通してである。

おわりに

以上，英語教師と生徒指導主事との両面における研修として翻訳を試みた次第であるが，英文を翻訳する時，あまりにも意訳すると，英文の味がなくなってしまうし，勿論，直訳では，文脈が不可解になり，意味が取れなくなってしまい，誠にむずかしい事を痛感した。また，心理学的な学習も希薄であり，基礎的な勉強を多くしなければならないと思った。

しかし，これらの内容から，日々の子供の生活を観察し続け，何を目的(goal)として子供が行動をしているのかを，親(教師にも当てはまると思う)は知らなければならない事，また子供に対して過度な期待を持たずに，現在の最も良い事を認めてやるべきである事等，毎日の子育てや教育活動に役に立つ事を学び取れたことを幸せに思っている。翻訳のまちがい等読者諸兄からのご指摘ご訂正をお願いいたします。

参考文献　・教育相談事典　　金子書房
・アドラー心理学入門　　H. オグフー　　清水弘文堂
・子どもの劣等感　　アドラー　　(誠信書房)
・子どものおいたちと心の成り立ち　　(ミネルバァ社)
・翻訳の初歩　　別宮貞徳　　(ジャパンタイムズ社)